

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

長崎大学移植・消化器外科での研修を終えて

島根大学医学部 Acute Care Surgery 講座

松本 亮

この度、日本臨床外科学会国内外科研修制度により、2023年11月1日から11月28日までの4週間を長崎大学移植・消化器外科で研修させて頂きました。

まず始めに、このような大変貴重な機会を与えて頂きました日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長はじめ委員の皆様、私を推薦いただきました当科の教授である渡部広明島根県支部長に厚く御礼申し上げます。また、ご多忙の中でも研修を承諾いただき温かいご指導を賜りました。江口 晋教授をはじめとした長崎大学移植・消化器外科のスタッフの皆様、研修受け入れの際から様々な調整をして頂いた井上悠介医局長、研修で不在の間も勤務を支えてくださった島根大学医学部 Acute Care Surgery 講座の皆様にご心より感謝申し上げます。

島根大学の Acute Care Surgery 講座は、主に急性腹症を中心とした緊急手術 (Emergency General Surgery)、術後患者に対する集中治療 (Surgical Critical Care)、体幹部外傷に対する根治的手術 (Trauma Surgery) を診療領域としており、それに加えドクターカーや各種ヘリなどを使用した病院前診療、外傷患者の入院管理、Rapid Response System、災害対応など幅広い役割を担っております。Acute Care Surgery を専門とする私が長崎大学での研修を希望した理由は、肝移植を中心とした全身状態が悪い患者さんの手術、周術期管理や慢性期の管理を学びたかったこと、普段接することの少ない最新の高難度手術を改めて学びたかったことです。また、長崎大学移植・消化器外科の中には Acute Care Surgery の分野でもご活躍されている先生方が多くおり、普段から協力し診療にあたっている島根大学医学部消化器・総合外科学の日高匡章教授、田島義証前教授も当講座の出身であったことも後押しとなりました。そのため研修中は主に肝胆膵グループに所属し、ご指導いただきました。

長崎大学では1997年に第1例目の生体肝移植が行われ、現在までに350例以上の生体および脳死肝移植が行われております。ちょうど研修期間が開始される直前の10月末に脳死肝移植が行われ、11月中にも2例の生体肝移植が行われたため、まさに目的としていた肝移植の手術や周術期管理を存分に研修することができました。当初は英語での術前プレゼンテーションや見慣れない検査値の数々に圧倒されましたが、温かくサポートして頂き何とか乗り切ることができました。肝移植手術当日は江口教授や曾山准教授、肝胆膵グループの先生方が術前に病室まで訪れ、手術室の直前まで患者さんに寄り添い入室を見守っていたことが大変印象的であり、緊張感をもって手術に臨むことができました。レシピエント手術は長時間に及び、ドナー手術も並行して行われるため、手術当日はチーム一丸で協力し合いながら手術が進行していました。手術はパートごとに細かく分類され、各パートに担当者が割り振られるため、長時間の手術でも自分の役割に責任を持って手術に臨むことができました。また、肝静脈・門脈の血行再建やマイクロを用いた動脈吻合、胆管吻合は技術的にも大変勉強になることが多く、肝不全で凝固機能が低下している患者さんにおける術中の止血技術は外傷手術の際にも参考になるようなものばかりでした。術後はICUでの管理が始まりますが、エコーでの肝血流の評価や免疫抑制剤の調整、volume管理などを日々、集中治療医と協力し行っていました。長時間の手術侵襲に加え術前の状態も決して良くなかったはずが、スムーズに抜管に至りICUから退室する様子を目の当たりにし、先生方の技術力の高さを改めて実感することができました。

また、肝移植だけでなく、高難度肝胆膵手術も多く経験することができました。特にロボット支援下の肝切除術や膵頭十二指腸切除術のような、一般市中病院ではなかなか経験することができない超高難度手術も勉強することができました。このような手術では、開腹手術では視認することの難しかった一つ一つの組織や神経線維などの構造物まで確認しながら手術を進めることができるため、非常に低侵襲かつ安全な手術を行うことができると感じました。研修期間中には移植・消化器外科での肝胆膵領域ロボット支援下手術が通算100例を達成され、今後、ますます発展されることと思います。

さらに、日々の予定手術だけでなく緊急手術にも多く対応されていることが大変印象的でした。11月は急性胆嚢炎や重症外傷、Fournier壊疽といった疾患に対する緊急手術があり、こちらにも参加させて頂きました。特に外傷症例の際は休日であったにも関わらず、多くの先生方が診療に参加され、チーム一丸で手術を行い救命することができました。働き方改革からは逆行してしまう部分もあるかもしれませんが、普段から多忙を極めている中でも手術でしか救命できない命を熱い気持ちを持って救命する姿勢からは、まさに外科医の原点を感じずにはいられませんでした。

長崎の街は大変温かく、コンパクトな街並みの中に、歴史的な情緒と革新的な技術、田舎の安心感と都会的な洗練さが凝縮されているような、とても趣深いところでした。そのような長崎の街を反映するように、様々な魅力がぎゅっと凝縮されたスタッフの方々に温かく支えて頂き、大変楽しく充実した研修期間を過ごすことができました。専門分野が違えど、外科学の基本は、病態生理の理解、解剖学の基礎的知識、手術の基本的な手技とトラブルシューティングであると改めて実感することができ、大変参考になることばかりでした。特にAcute Care Surgeryを専門とする外科医は、大学の外科学医局に所属していない医師も多いため、このような貴重な研修の機会として今後も本制度が継続していくことを熱望しております。

最後に改めまして、本研修にご協力いただきました皆様に感謝の気持ちを申し上げます。

貴重な時間を作って頂き、誠にありがとうございました。